

日本の英知が集結する令和の水滸伝⑧

宗教哲学研究者 出口三平氏

なぜ丹波から王仁三郎は世直しを叫んだのか

編集部

出口三平氏ならではの

王仁三郎研究

5月のオンライン講演に登場したのは出口三平氏。彼は新宗教『大本』とその2大教祖の1人である。出口王仁三郎の研究者であり、信奉者でもある。



出口王仁三郎

京都大学文学部哲学科在学中は、学園闘争のピーク。大本や王仁三郎がモデルとは知らないままに、高橋和巳の『邪宗門』は読んでいたが、実際の『大本』に足が向かったのは、顕幽を超える不思議な縁もあったらしいが、王仁三郎の孫・出口和明が書いた『天地の

母』（全12巻・毎日新聞社刊）がきっかけであったという。

三平氏によれば、出口和明氏の本のどこが面白かったかというと、この世だけでなく、神霊界、邪霊界、色々な思惑や願望が絡み合い、明治以降の近代日本の霊性世界が動いているらしいことを、ドキュメントして描き出していたからだろう。その構造は現代もあまり変わらないという。

『大智の母』出版元の毎日新聞社の編集長が「神霊現象などの多い、こんな変な本は、天下の毎日新聞社からは出せない、心霊現象などは書かないでほしい」と著者に抗議していたらしいが、フィクションではないことも分かり、編集長も全12巻、結果的に出してくれたという。

三平氏には、『スサノオの宇宙へー出口王仁三郎の「霊界物語」を語

る』、『新宗教時代（1）大本』（ともに共著）などがある。

この日の話は、王仁三郎が監督・主演映画「昭和の七福神」（1935年9月完成）という映画の動画紹介から始まった。

王仁三郎が七福神に扮装し陽気な空気が（三平氏は、王仁三郎のなかに生動する霊性を「うた」「生言霊」というようだ）。しかしその3ヵ月後、1935年12月8日には、大本教団の壊滅を目的とする政府あげての弾圧、第2次大本事件が勃発する。

その短編映画を皮切りに、そもそも『大本』とは何だったのか、なぜ丹波の地からか、古代に遡る歴史因縁、その因縁解消に、王仁三郎はどう取り組んでいったか。彼はいかなる世直しを叫んでいたのか、などなど、明治以降

昭和20年までの時代背景を織り交ぜながら、あくまでも王仁三郎の内的な霊性に重点を置いた話であった。

『大本』は一筋縄では整理できない深さ、複雑さを抱えている。

そもそも『大本』とは、出口なおとその娘婿である「出口王仁三郎」が興した神道系の新宗教であり、一般的には「大本教」と呼ばれるが、正式名称には「大本」である。

1892年（明治25年）2月3日に、京都府綾部に住む貧しい初老の女性である「出口なお」に「うしろのこんじん（良の金神）」と名乗る神霊が憑依。

その神霊は、地球の主宰神である国祖・国常立尊であると名乗り、悪の世の世直しを宣言する。

『大本』では、この節分の日をもって開教の日とし、悪神として封じられていた神（国祖神）の再出現の祭典として「節分大祓」の大祭を行っている。

丹波から世直しを叫ぶ

出口三平氏のお話は、この『大本』と出口王仁三郎をめぐるさらに広がっていく。王仁三郎の出生地は

『智の梁山泊』

京都府亀岡市であり、「大本」の本部は亀岡市と綾部市にある。さらに王仁三郎の自伝には

「雄略天皇の勅命に依って、豊受姫大神を丹波国丹波郡丹波村比沼真奈井より、神風の伊勢国山田の村に移し祭り賜う神幸の途次、曾我部郷の宮垣内の聖場を扨んで神輿御駐輦あらせられたのである。

祖先が天児屋根命と云う縁故を以て、特に其の邸内に御旅所を定められた。一族郎党は恐懼して、丁重なる祭典を挙行し奉る際、神靈へ供進の荒稻の種子が、太く老いたる槻の樹の腐り穴へ散り落ちた。それが不思議にも、其の腐り穴から稲の苗が発生し、日夜に生育して、終に穂を出し、美わしき瑞穂を結んだ。里庄以て神の大御心と仰ぎ奉り、一大祈願を為し、神の許しを得て、所在の良田に蒔き付け、千本と曰う名を附して、四方に植え拔め、是より終に穴穂の里と謂うたのである。

当時の祖先は家門の光榮として、此の祥瑞を末世に伝えんが為に、私財を投げ出して、朱欄青瓦の荘厳なる社殿を造営し、皇祖天照大御神・豊受姫大神を奉祀し、神明社と奉称

し、親しく奉仕したのである。

其の聖跡は、現在上田家の屋敷なる、宮垣内である。宮垣内の名称は神明社建造の時より起こったのである。同社は文禄年間、川原条に移遷され、今猶老樹鬱蒼として昔の面影を止め賜うのである。〔王仁三郎「故郷の二十八年」穴太の名義から〕とあり、王仁三郎の生誕地である亀岡市曾我部町穴太宮垣内は、豊受大神の因縁地として知られている場所である。そしてそこに古来よりある「小幡神社」は、社伝によれば、開化天皇の第二皇子・崇神天皇の十年、四道將軍丹波道主命が崇神天皇の父・開化天皇を祀ったのが起源で、開化天皇の第三皇子・彦坐王と彦坐王の御子・小侯王を配祀した古社で、和銅元年（708）大神狛麻呂が社



小幡神社(亀岡)

殿を造営したという神社である。

そして昭和7年頃には王仁三郎は開化天皇賛歌を作っている。
 稚日本根子比古大毘毘天皇の神を祭りし小幡の大宮
 あたらしき若き日本の根本の宮の氏子と生れしわれなり
 新日本もつつ光を地の上にあまねく照さむ御名ぞかしこき
 大毘毘の神の命のあれまきむ世は近づきこの地の上に
 石の上ふるきゆかりのあらはれて世人おどろく時近みかも
 いっはりの殻ぬぎ捨てて天地の真木の柱の道光るなり
 古のいつはりごのごとくごくらけ出さるる神の御代なり
 最上の善とおもひし事柄のあやまらあるを宿る神代かな

〔回顧歌集「朝風」27〜28頁〕
 さらに亀岡市には「高熊山」という王仁三郎が明治31年の冬に「高熊山修行」を行った岩窟のある穴太の里山があり、亀岡は「富士古文書」では、日本の西の中心地とされた桑田宮があったところとされる。ちなみに東の中心地は富士山北麓の地である。

出口三平氏の考察は、今から約1万3000年以上前の上古代の東アジア一帯、特に日本（当時は日本列島がまだ大陸と陸続きだったという）で高度に発達し、言霊を元にした宇宙物理学とされる「カタカムナ」にまで及び、王仁三郎がこの亀岡の地を中心に世直しを叫ぶ（出口三平氏によれば「うたう」）（＝歌う、謳う、謡う、詠う…）までのさまざまなる事象に及び、単に『大本』と王仁三郎のへの考察にとどまらぬ壮大な文化論へと及んでいく。

誌面でその深淵なる考察のすべてはお伝え出来ないが、単に宗教論にとどまらない出口三平氏のお話は、まさに「文化論」そのものであった。

